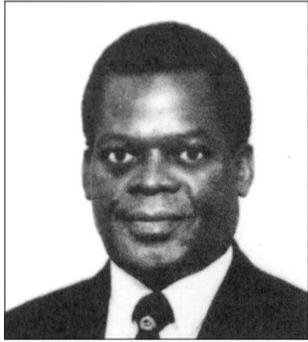




KWACHA

No.9

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。



マラウイ大使着任!

駐日マラウイ大使館は本年2月6日付けをもって東京に開設され諸準備が進められていたが、5月6日に初代駐日マラウイ国大使 Zimani D. Kadzamira 氏が着任された。6月29日には天皇陛下への信任状奉呈を終えられ、大使館業務はいよいよ本格的にスタートした。

この度、参事官の Z. T. Soko 氏から大使館開設についてマラウイ協会会員への挨拶状を賜ったので全文を掲載する。



久々の面々と記念撮影

1992年7月4日 ~協力隊事務局屋上にて~

Establishment of the Malawi Embassy in Tokyo

In recognition of the existing friendly political and economic ties between Malawi and Japan, the Malawi Government decided to open a resident mission in Japan. The main purpose of the Embassy, which is based in Tokyo, is to promote cultural further strengthen these ties exchanges in order to enhance greater international understanding and cooperation.

Prior to the opening of the mission, an appraisal team visited Japan in August/September 1991 to work out a programme of setting up an office in Tokyo. Three diplomats and their families arrived in Tokyo on 5 February 1992. The Malawi Embassy was opened on 6 February 1992 at temporary offices and later moved to its present premises on 2 March 1992.

His Excellency the Ambassador and his family arrived in Tokyo on 6 May 1992. A few days later, he paid a courtesy call on the Vice Minister for Foreign Affairs. The Ambassador presented his letter of credence to His Majesty the Emperor on 29 June 1992 at the Imperial Palace. During the occasion, the Ambassador presented to the Emperor members of staff of the Malawi Embassy.

Among the first engagements which the Ambassador attended was the "Nsima party" on 4 July 1992 organized by the Malawi Society of Japan at Hiroo to which all Embassy staff and their families were also invited. This was a very colourful occasion although at one solemn moment the Ambassador joined Mr Akiyama in laying wreaths in remembrance of JOCV volunteers who passed away while on service overseas. Apart from eating "NSIMA" made from yellow corn flour, the gathering enjoyed a number of shows put up by ex-volunteers including singing, memories of Malawi and quiz sessions. Scenic photographs on aspects of Malawi were presented to the Ambassador. It was indeed a memorable and joyous occasion.

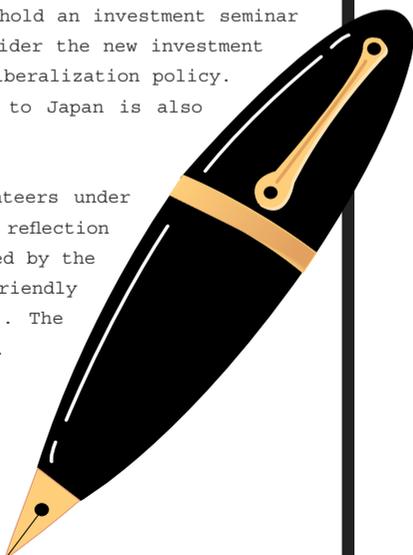
On 6 July 1992, the Malawi Embassy hosted a reception in Tokyo to commemorate Malawi's 28th Anniversary of Independence. Over 100 people attended the reception. Apart from diplomats, a number of ex-volunteers of the Malawi Society of Japan attended the reception. At the function, Mr T Akiyama, Vice chairman of Malawi Japan Association proposed a toast to the continued goodrelations between Japan and Malawi.

One of the main functions of the Embassy is to promote trade and investment between Malawi and Japan. In this respect, the Embassy plans to hold an investment seminar on Malawi for potential investors. The seminar will consider the new investment policies in Malawi and discuss its continuing economic liberalization policy. An exhibition of Malawi products which can be exported to Japan is also being planned. Tourism will also be featured.

Malawi is one of the major recipients of Japanese volunteers under programmes by JOCV. The success of this programme is a reflection of the high caliber and dedication of volunteers recruited by the Japanese Government and their fond recollections of the friendly and peaceful environment of the "Warm Heart of Africa". The Embassy will strive to enhance this technical cooperation.

MALAWI EMBASSY
TOKYO JAPAN

4 Aug. 1992



記念大懇親会開かれる

マラウイ独立28周年、駐日マラウイ大使館開設、日本マラウイ協会設立10周年を記念して、日本マラウイ協会主催の大懇親会が7月4日(土)午後3時から、協力隊事務局食堂で開催された。当日は駐日マラウイ国大使 Zimani D. Kadzamira 氏夫妻、大使館スタッフ並びに御家族のご参加を賜り、遠くは広島、愛知、仙台、福島からもOB、OG、留守家族が駆けつけ、総勢80名を超す文字どおりの大懇親会となった。

初めにマラウイ国歌吹奏のあと、場所を一旦、事務局正面の物故隊員慰霊碑前へ移し、大使および秋山忠正日本マラウイ協会副会長による物故隊員への献花、全員による1分間の黙祷を行った。

再び会場を食堂へ戻し、秋山副会長が挨拶し、我々の長年の願いであった大使館が開設され、これから日本とマラウイの多方面の交流が容易に、より活発になることを期待すると述べた。続いて大使が、これまでの日本の協力隊員によるマラウイへの貢献に感謝の意を表すると共に、大使館開設に伴い、マラウイ協会や協力隊、日本の各界との結び付きを一層深めていきたいと挨拶された。

この後、元写真隊員である相馬OB(63年度2次隊)や加涌OB(元年度1次隊)らから、隊員活動時代に撮影したマラウイ国内の風景写真などのパネルを大使に贈呈した。これらパネルは大使館内に掲げられることになっている。

続いて笹子実元調整員による乾杯の音頭で懇親会は始まった。会場には多くの人の輪ができ、大使と留守家族が並んで写真撮影をしたり、OBが間に入って通訳を務める姿も見られた。

この会は「シマを食べる会」とも称され、例年はマラウイ産のシマを食べることが出来るのが特徴であった。しかし今年マラウイをはじめとする南部アフリカ地域の深刻な旱魃を考慮し、マラウイからシマを輸入することをやめ、日本国内で入手可能なアメリカ産のイエローメイズを調理した。

自己紹介のコーナーでは、多くの参加者がチェワ語、英語で行ったが、なかでもチェワ語の歌を披露したOB/OGは大使をはじめ、大使館職員夫人らから大喝采を受けた。

恒例のマラウイクイズ大会では、OB/OGをはじめ、大使のお子様からも正解が出て、賞品としてマカダミアナッツ、マラウイ茶などを獲得した。

最後に屋上に集合して記念撮影を行い、来年の再会を約し、盛会のうちに散会した。



大使に写真パネルを贈呈する加涌OB

1992年7月4日 ~協力隊事務局食堂にて~



挨拶する秋山副会長

1992年7月6日 ~東京・港区の新高輪プリンスホテルにて~

Republic Day 祝賀パーティー開かれる

駐日マラウイ大使館主催の Republic Day 祝賀パーティーが平成4年7月6日(月)午後6時から東京・港区の新高輪プリンスホテルにて開催された。

これは独立28周年、共和制移行26周年を祝うとともに大使館開設を記念するもので、在京各国大使館/外交関係者、マラウイにゆかりのある企業、報道関係などが招かれた。当協会も招待を受け、秋山副会長をはじめ貝塚専務理事、山村理事、岡田理事、河野理事、上田理事らが出席した。

大使の歓迎の言葉のあと、挨拶に立った秋山副会長は、その昔マラウイを探検したりビングストーンも、今日マラウイ代表団が日本に上陸するようになるとは想像もしなかったであろうと述べ、これからマラウイと日本の多方面の交流を促す役割を担う大使館の開設を喜んだ。

大使夫人をはじめ大使館職員夫人らマラウイ女性は、おなじみの大統領の肖像がプリントされたチテンジドレス姿、また、その他の外交団女性の中にもそれぞれのお国の民俗衣装をまとった方がおられ、参加者は華やかな雰囲気の中で Republic Day を祝うと共に、各界との相互の交流を深めていた。



駐日マラウイ大使と大使館職員および家族一同

後列左から3人目が大使、中列右端は大使館職員の川島 OG

1992年7月6日 ~東京・港区の新高輪プリンスホテルにて~

日本マラウイ協会総会開催

平成3年度(第10回)日本マラウイ協会総会が平成4年5月9日(土)午後3時から東京・渋谷のヒルポートホテルにて開催された。

総会は秋山副会長の挨拶の後、平成3年度の事業報告、決算承認、続いて平成4年度事業計画案および予算案の審議を行い、いずれも満場一致で承認された。平成4年度事業計画には、マラウイ国内の NGO との連携による共同事業の可能性を探るため、来年度実施を目標とした事業の選定および調査研究を行うこと、会員向けのニュースレターの発行が含まれている。なお、一部役員辞任に伴い、進藤寿則氏を新理事に選出した。

今次総会の特徴として、会場出席者が28名と近年にない多数であったこと、また複数の隊員留守家族会員の出席があったことから、会員相互間での一段と有意義な情報交換の場となったことが挙げられる。

MALAWI NEWS 社説

1992年4月25日~5月1日号から抄訳

マラウイ、その指導者および政府のシステムに対する敵は、国民の大多数が多党制に対する要求に対して「No」と言っている事実にもかかわらず、まだ騒ぎ立てている。

政府を批判するパンフレットが国のいたるところで配布され、党の指導者達を侮辱する匿名の手紙が党や政府の指導者達個人に対して送られている。

これでも充分ではないかのように、マラウイ人の小さなグループが、政府の多党制度、民主主義、人権、言論の自由を要求して、終身大統領ングワジ・ヘイスティング・カムズ・バンダ博士に会うために自分達を組織しようとしている。

このようなグループの人達がいるということを知るのは興味深い。なぜなら匿名のパンフレットや手紙のミステリーが解決されるからである。我々は、このグループが署名無しの手紙を書くより隠しだてをしないことになったことは勇気あることだと思う。というのは正体が判らない悪魔よりそれが判っている悪魔の方がまだからである。我々は政治の舞台で彼らに挑戦する。

この国における政府の一党システムの展開については既に多くのことが言われてきた。終身大統領の言葉のなかで、マラウイ会議党は勢力の統一と安定のためだけでなく、マラウイ国民の日々の生活の質の向上のための手段である運動として受け入れられている。

とりわけ、一党システムは国民の意志により投票を通じてそのようになったものであり、運動は、特に村の人々の大多数において、幅広い支持を得ている。

我々は今、この国が1964年の内閣反乱以来、最も試練の期間を耐え忍んでいることを知っているが、この国の人々は、ゆすりや国民自身が従うことを決めた政府システムを変えようとするいかなる最後通告にも屈服しないだろう。

これは不満をいだくごく少数の都市部住民と彼らの西側給与支払者に対する警告である。

マラウイクワチャ切り下げ

Daily Times 1992年6月12日号から抄訳

大蔵大臣はマラウイ準備銀行とともに、昨日(6月11日)付けでマラウイクワチャを22%切り下げたと発表した。

銀行の報道発表によると、この対策は、他の南部アフリカ地域と同様にマラウイが苦しんでいる深刻な早魃から生ずる悪い影響を和らげる目的で政府が導入した施策の重要部分である。

「マラウイは食料援助の形で多額の人道的援助を受けるだろう。しかしながら、マラウイの人道的要求に対する援助側の寛大な反応にもかかわらず、マラウイ自身の財源から支払われなければならない食料需要とまだ相当の開きがある。」と報道発表は述べている。

発表は、為替レート変更は(世界銀行などの)構造調整プログラムの支援を受けて、多くの援助機関から必要な財源支援を得るために国を手助けするにちがいないと述べさらに、この対策は輸出の競争力を取り戻し、もって経済におけるビジネスの士気と投資者の自信をつり上げるだろうと述べている。

(注:この切り下げにより MK1.00 は約 32 円になった。)

Information Corner

HAPPY WEDDING NEWS

60年度1次隊の浪岡ひさ子 OG (助産婦) は 61年度2次隊の坂井勇夫 OB (森林経営) と平成4年6月14日にご結婚されました。

日本マラウイ協会ビデオライブラリーについて

日本マラウイ協会では当協会のオリジナル作品5本をはじめとするマラウイやアフリカ関連のビデオテープを、広く会員の皆様に返送費のみのご負担で貸し出しております。主なオリジナル作品の内容は次の通りです。(全て VHS、1本120分) 会員以外の方にも有料で貸し出しますのでご希望の方は葉書で右記の当協会までお申し込みください。

- (1) マラウイ独立25周年記念式典(1989年7月)
カムズスタジアムで独立記念日に催された式典とお祭りなどを紹介
- (2) From Warm Hearts of Africa
マラウイの暮らしと風物をエッセイなどと共に紹介
- (3) Malawi 1988-1990
フュージョンサウンドをバックにマラウイの風景と JOCV の活動現場を紹介
詳しい内容や、その他のテープの内容については別紙を御参照下さい。

現地隊員の皆様へ

KWACHA 編集部では現地隊員の皆様からのお便りや原稿をお待ちしています。ご自分の活動内容に関するもの、住んでいる町の話、隊員間で話題になっていること、当協会に希望することなど何でも結構です。随時 KWACHA に掲載し、お手伝いできることをしたいと考えています。宛先は右記をご参照ください。

UNHCR 緒方貞子氏 大統領を訪問

MALAWI NEWS 1992年2月29日号~3月6日号から抄訳

終身大統領ングワジ・ヘイスティング・カムズ・バンダ博士は、昨日、わが国の100万人の難民のためにさらなる食料と井戸の必要性があると語った。これは、国連難民高等弁務官事務所の緒方貞子氏が大統領のムトゥンタマ公邸を訪ねた際に語ったものである。

終身大統領は、多量の難民人口にも関わらず、わが国は彼らの援助に最善をつくしていると述べた。

彼は UNHCR の長に対し、マラウイにおける難民の問題は今に始まったことではなく、植民地時代からのものであり、そのときはマラウイにいたイギリス人より厳しかったポルトガル人とドイツ人に支配されていたモザンビークとタンザニアから難民がやってきたと語った。

彼は、そのとき難民がマラウイに集中した理由を、わが国が特に中部では国民は伝統的に農民であったので、いつも自給自足できる状態であったからだと言った。

ングワジは、現在の難民問題は国に流入している難民の量であり、国の資源に対して増大する需要を突きつけていることであると述べた。

これに先立ち、緒方氏はマラウイはアフリカで最も難民問題に専念していると述べ、モザンビーク難民を寛大な方法で世話をしているマラウイ政府に対し感謝の意を表するとともに、犠牲難民が国の資源や環境を圧迫していることは判ったと終身大統領に報告した。

緒方氏は、モザンビークの内戦は間もなく終り、UNHCR はマラウイ政府と協力して難民を本国へ送還できるであろうと期待を表明した。

昨日、カベシ I、II、カツェカミング、ムクトゥ、ムランガリ、スカスカ、カバラムラからカベシ I に集まった2万人以上の難民を前に、緒方氏は UNHCR は必要な限り援助を続けると述べた。しかし氏はまた「皆さんがお国に再び帰ることができて幸せに暮らせることを期待します。」とも述べた。

緒方氏は、マラウイ人、特に難民と共に住み世話をしているデッサの住民の生活を暮らし易くしている国際機関やマラウイ政府に対し感謝の意を表明した。



■入会のおすすめ

日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan) は日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。電話をいただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。また、入会金と年会費の合計(個人正会員の場合 1000円+3000円=4000円)を下記の銀行口座または郵便振替口座へお送りください。(郵便振替口座が安くて便利です。)

〒106 東京都港区南麻布 5-10-24 第2 佐野ビル 702
日本マラウイ協会 TEL03-3447-2181
三和銀行 東恵比寿支店 普通口座 255739
口座名義人 日本マラウイ協会会長 卜部敏男
郵便振替 東京 9-13125 日本マラウイ協会

また、協会規約その他についても上記宛お問い合わせください。

■会費納入のお願い

会員の方は平成4年度会費を上記口座へ送金をお願いします。(個人正会員年 3000円) 皆様の会費によってこれらの資料をお送りしております。各自の負担を均等に心がけていただきますよう御協力をお願い致します。なお、郵送の必要の無い方は至急お知らせ下さい。